

フランス、パレスチナの残骸を承認

2025年9月、フランスの大統領エマニュエル・マクロンは国連総会の場に立ち、パレスチナ国家を承認するだろう。慎重に言葉を選んだ演説は、平和、尊厳、国際法への訴えに満ちているだろう。カメラのフラッシュが光り、外交官たちは拍手し、ニュースの見出しはこれを「歴史的瞬間」と宣言するだろう。しかし、誤解しないでほしい：**フランスが承認するのは国家ではなく、墓場だ。**

マクロンがその宣言を行う頃には、ガザは焼け野原となり、世界が救うことを選ばなかった人々の骨が散らばっているかもしれない。フランスのジェスチャーは、どんなに善意であっても、葬儀が終わってずっと後に送られる哀悼の手紙のような、陰惨なタイミングでやってくる。外交の名の下に、パリは灰の上に旗を掲げるだろう。

皮肉にまみれたジェスチャー

フランスは、この承認が二国家解決を復活させるための、より広範な平和への取り組みの一環だと主張している。マクロンはいつもの前提条件を提示している：ハマスを武装解除し、人質を解放し、パレスチナ自治政府を改革すること。書面上では合理的に見える。実際には、まるで風刺のようだ。ガザは完全な包囲下にある。ヨルダン川西岸はリアルタイムで併合されている。そしてフランスは、パレスチナ人——その多くが飢え、避難民となり、または死んでいる——に、彼らが民族として認められる前に政治を整えるよう求めている。

血にまみれていなければ、笑いものだっただろう。

ガザ：鉄条網の裏で飢える

はっきり言おう：**ガザは監獄であり、そこにいる人々は餓死させられている。**2025年3月以来、イスラエルは陸・海・空からの完全な封鎖を課している。すべての国境検問所はイスラエルの支配下にある。外国のジャーナリストは入ることが許されない。国際的な援助物資の輸送も許可されていない。**海上封鎖**は完全に維持されている。何も入らない。誰も出られない。

これは人道危機ではない。人為的に作り出された、官僚的な精度で設計された飢饉だ。

国連と国際平和会議は、ガザが現在**第5段階の飢饉**——集団的飢餓——にあることを確認している。農地の70%以上が破壊された。海水淡水化プラントは爆撃されるか、燃料を奪われている。ほとんどの人は塩水や汚染された水を飲むか、まったく飲めない。

驚くべきことに、AFPやアルジャジーラなどの国際メディアに雇われた少数の地元ジャーナリストが、現地からの報道を続けている。彼らは自分たちの社会の崩壊を報じることで安定した収

入を得ている。近隣の人々が草を食べ、街が瓦礫に変わる中で、記事を書くために報酬を得ていることを想像してほしい。それはジャーナリズムではなく、生存者の証言だ。

イスラエル：法を犯しても罰せられず

イスラエルは、占領国として、第四ジュネーブ条約に基づき、民間人に食料、水、医療へのアクセスを確保する義務がある。しかし、イスラエルはこれらすべてを意図的に拒否している。

また、2024年1月と3月に、ガザへの人道援助を許可し、ジェノサイド行為を防ぐためのすべての措置を講じるよう命じた国際司法裁判所（ICJ）の2つの別々の判決を無視している。イスラエルは両方を無視した。

はっきりさせよう：これは単なる道徳的失敗ではなく、明白かつ継続的な犯罪だ。戦争の手段としての飢餓は、国際人道法で禁止されている。また、ローマ規程に基づく戦争犯罪でもある。それでも、イスラエルは意味のある結果を伴わずに締め付けを続けている。

ヨルダン川西岸：消滅による併合

ガザが飢える一方で、ヨルダン川西岸は死体のように切り刻まれている。イスラエルのクネセツトによる領土併合の非拘束投票——入植地の建設急増と軍事襲撃とともに——は、実行可能なパレスチナ国家の可能性を打ち砕いている。フランスは9月にパレスチナを承認するかもしれないが、その時まで承認すべきパレスチナは残っていないかもしれない——ただ、包囲され埋もれた断片だけだ。

国際社会：行動しないことで有罪

フランスの発表は、より深刻な真実を浮き彫りにする：国際社会は失敗しているのではなく、共謀している。ジェノサイド条約に基づき、国々はジェノサイドを防ぐ義務があり、事後に非難するだけでは不十分だ。保護責任（R2P）の原則によれば、集団が大量虐殺犯罪に直面している場合、行動しなければならない。

それでも、国際的な対応は嘆きと中途半端な措置の混在に過ぎない。援助の封鎖は続いている。イスラエルへの武器輸送は続く。ICJの判決は無視されている。制裁も、禁輸も、意味のある行動もない。

はっきり言おう：イスラエルが飢餓を武器として使用することを許すことで、世界はジェノサイドに参加している。

結論：墓の上に掲げられた旗

フランスがパレスチナを承認するという誓いは無意味ではない——だが、恐ろしくタイミングが遅い。承認は救済ではない。飢えた者を養い、避難民に避難所を提供することはない。死者を蘇らせることもない。包囲を打破し、ガザに援助を溢れさせ、国際法を執行するための緊急の行動がなければ、フランスの承認は正義の行為ではなく、追悼の言葉となる。

9月にマクロンがパレスチナの旗を掲げる時、世界は問うべきだ：**彼は主権国家に敬意を表しているのか、それとも私たち全員が見捨てた犠牲者を悼んでいるのか？**

もし後者なら、これは外交ではない。共謀だ。